

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520241

研究課題名(和文) 20世紀アメリカ文学における進歩のデザインと破局の表象に関する文化史的研究

研究課題名(英文) A Cultural History of Progressive Design and Representation of Catastrophe in 20th Century American Literature

研究代表者

渡辺 克昭 (Watanabe, Katsuaki)

大阪大学・言語文化研究科(研究院)・教授

研究者番号：10182908

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円、(間接経費) 930,000円

研究成果の概要(和文)：未来を常に既に先取りし、進歩を追求し続けてきたアメリカ的想像力が、その例外主義的なヴィジョンを根底から揺るがす惨劇といかに向き合ってきたか。このような視座から、アメリカ文化を特徴づける進歩のデザインと技術を唐突に打ち砕く死の表象を相関的に分析しようとする試みは従前なされていなかった。本研究は、20世紀アメリカの日常に浸透する進歩の言説と、度重なる惨事や破局によって前景化される死への眼差しがいかに交錯してきたか、そのダイナミズムを多様な表象分析を通して描出した。その結果、互いにフィードバックし合う両者の間には、互いにエネルギーを供給し、新たな関係を生成する界面が存在することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The primary purpose of this research project is to analyze how American imagination, which has always already preempted future and pursued progress, has come to terms with contingent catastrophes, disasters, and terrorism which have undermined the very foundation of its future-oriented exceptionalism. From this unprecedented perspective, the project tried to delineate the idiosyncratic crossroads between technologically enhanced designs characteristic of American culture and representations of lethal havoc which abruptly shattered its assumptions. Through this investigation the dynamic interfaces have been detected where the progressive discourses infiltrated into twentieth century American life and visions of death, which recurrent calamities have foregrounded, give feedback to each other with their energy replenished to generate a new phase of relationship.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：アメリカ文学 進歩 破局 表象 デザイン 進化 ドン・デリーロ リチャード・パワーズ

1. 研究開始当初の背景

墮落した旧世界と決別し、専ら幸福を追求する合衆国において、進歩の言説は特段の意味を賦与され、それが及ぶ領域も自然の征服、物質的充足、領土拡張、科学の進歩、宇宙開発、優生学、衛生、人権・環境意識の向上など多岐に渡る。とりわけ、エネルギーと進歩の意識に焦点を絞った *Electrifying America* (1990)、*Consuming Power* (1998)、*America as Second Creation* (2003) など、David E. Nye の一連の著作と、Raymond F. Betts の *A History of Popular Culture: More of Everything, Faster and Brighter* (2004)、万博という文化装置を論じた Robert W. Rydell の *World of Fairs* (1993)、宇宙開発とポストモダン・ナラティブの関係を論じた William D. Atwill の *Fire and Power* (1994)などは、合衆国がいかに重層的にテクノロジーの進化とともに、自己形成してきたかを、説得力をもって提示している。

だが、Nye に影響を与えた Leo Marx が、*Progress: Fact or Illusion?* (1996)において述べているように、未来への直線的な進歩の神話には、常に揺らぎと拭い難い不信感が取り憑いてきたこともまた事実である。革新主義に彩られた20世紀の幕開けとともに、移民の大量流入、都市のスラム化、労働争議、第一次世界大戦、世界恐慌へと、合衆国は社会不安と血生臭い未曾有の破局に否応なく突き進んでいく。さらには、ファシズムの台頭、ホロコースト、原爆投下、核の恐怖、キューバ危機、JFK暗殺、ベトナム戦争の敗北、原発事故、チャレンジャーの打ち上げ失敗、WTCの崩壊といった具合に、死とパニックとトラウマを孕んだ破局と惨劇は、悪夢のように合衆国に取り憑いてきた。またさらに、ポスト構造主義は、メタナラティブとしての直線的な進歩神話を脱構築し、その妥当性に

疑義を突きつけた。また、ポール・ヴィリリオが『速度と政治』(2001)、『アクシデント 事故と文明』(2006)で論じたように、年々加速する速度術もまた、アメリカを破局の渦に巻き込んできた。このようにアポカリプスへの不安を孕みつつも、合衆国の進歩神話は根源的に払拭されることなく、アメリカ的日常のあらゆる局面に巧妙かつ重層的に浸透し続けている。このような状況において、両者がいかに有機的な連鎖をなし、互いを生成し続けてきたか、その複雑な関係性を文学テキストの分析を通じて解明しようとした試みた研究は、ほとんど見当たらない。

2. 研究の目的

9.11 から既に12年以上の歳月が経過し、多様な分野から検証が進みつつあるが、建国以来一貫して未来を志向し、進歩を追求し続けてきたアメリカ的想像力が、そのヴィジョンを根底から揺るがす破滅的な惨劇といかに向き合ってきたか。このような視座から、アメリカの進歩のデザインと、それを唐突に打ち砕く死の表象を相関的に分析しようとする試みは従前なされていなかった。

本研究は、20世紀以降、グローバル化したアメリカ的日常に加速度的に浸透する進歩のデザインが、しばしば死を孕んだ表象困難なカタストロフィへのヴィジョンといかに縊り合されてきたか、交錯する両者の生成のダイナミズムを追究することを主眼とする。身体を介して蝶番で繋がれた生と死の関係がそうであるように、両者の間には互いの動態をフィードバックし合うことにより、新たな関係が生成されていくインターフェイスが存在するのではないか。もしそうだとすれば、それはいかなる様相を帯びているのか。本研究では、こうした問題意識に基づき、進歩との関係性において、破局や破滅を必ずしも明示的に提示していないテキストも射程に入れ、多角的に分析を進めた。

3. 研究の方法

本研究の遂行にあたっては、まずもって通時的観点により4つの時代区分を設け、それぞれの区分におけるアメリカの進歩と破局の表象を抽出し、多様なテキストに表象された両者の関係を具体的な事象との関連において実証的に分析することから始めた。1)世紀転換期～世界恐慌、2)30年代～第二次世界大戦、3)大戦後からベルリンの壁崩壊までの冷戦期、4)ポスト冷戦期から9.11をメルクマールとする21世紀への世紀転換期の4つの区分がそれに相当する。それぞれの区分において、その時代を特徴づける進歩をめぐる言説や表象を、社会・文化的、政治・経済的に多様な角度から検証するとともに、それらと相克をなす破局の諸相が、前者のさらなる産出と変容にいかなる影響を及ぼすか、テキスト分析を通じて両者の相関性を詳細に辿ったうえで、マッピングを行った。

その際バイオポリティカルな視点を重視しつつ、「生-権力」によって隠蔽された死が、その時代のメルクマールとなる破局とともに現出したとき、どのような反作用が生じ、それがまた新たな進歩のデザインにいかにか回収されていくか、身体論の視座も取り入れ、その動態を考察した。

以上の見取り図を踏まえたうえで、次に4つのメディアに焦点を絞り、進歩と破局の表象分析を共時的に行った。メディアと共振しつつ表象される進歩と破局がダイナミックに織りなすインターフェイスを解明すべく、小説というメディアが、他のメディアといかなる関係性を結び、進歩と破局を相関的に表象しているか、具体的に検証を試みた。扱ったメディアは以下の通り。

1)メディア系(新聞、雑誌、広告、プロパガンダ) 2)デザイン系(日用品のデザイン、インダストリアル・デザイン、環境デザイン) 3)アート系(ポップ・アート、ポスタ

ー、インスタレーション) 4)映像系(映画、TV番組、ドキュメンタリー・フィルム、ビデオなど)

4. 研究成果

本研究のケース・スタディーとして、まず手始めにリチャード・パワーズの『囚人のジレンマ』(1988)を取り上げ、主人公が没頭する架空の都市計画ホブズタウンと彼の被曝体験の関係を考察することにより、進歩とセキュリティをめぐるアメリカの逆説を、ニューヨーク万博、日系人強制収容、冷戦と核をめぐる問題系と絡めつつ検討した。『囚人のジレンマ』をめぐるジレンマは、軍隊、学校、病院というシステムに文字通り絡め取られた主人公エディが、フーコーの言う「生-権力」に抗えば抗うほど、バイオ・ポリティクスの虜となってしまうことである。その際前景化されるのが、作中人物としてのディズニーがミッキーマウスの魔法の箒を使って撒き散らす<フェアリー・ダスト>である。ディズニーは、アニメに対するメディアの政治的利用を逆手に取り、相互善意に満ちた理想世界の実現を模索するが、「囚人のジレンマ」的状况を克服しようとする彼の試みは、結局のところ逆説的な結果しかもたらさない。エディが自ら病の発端となったトリニティー・サイトに立ち戻るとき、この魔法の粉は、原爆の放射性フォールアウトへと反転する。本研究ではこうした逆説を踏まえ、エディの遺灰が散灰儀式によって<フェアリー・ダスト>として再び地上に落下したとき、さらにそれがいかに「生-権力」へと投げ返されるか、亡霊性を孕んだ<ダスト>のパルマコン性を浮き彫りにした。

本研究成果は、アメリカ学会第44年次大会部会において発表され、論文「ホブズタウンより愛をこめて 『囚人のジレンマ』からフェアリー・ダスト・メモリーへ」(『二世紀アメリカ文学のポリティクス』、世界思想社、2010年)として刊行された。

次に、人類の進化の終焉を射程に入れた哲学的考察をイラク戦争から導き出したドン・デリーロの新作『ポイント・オメガ』(2010)を取り上げ、人類の進化と破滅の恐怖が相互に織りなす無限大の時間相がいかに表象され、進化と終末をめぐるヴィジョンが文明の極限点に明滅する核の恐怖とどのように関わるかについて考察を深めた。文明の進化の臨界点に明滅する核の恐怖を炙り出している『ポイント・オメガ』は、時と消滅をめぐる茫漠とした想念そのものが中心的なテーマとして浮上するよう仕組まれた問題作であるが、そこで焦点化されるのは、ピエール・ティヤール・ド・シャルダンの進化論、オメガ・ポイント理論である。だが、ティヤールの唱える進化した人類の叡知の究極点「オメガ・ポイント」が、このテキストにおいてはむしろ終末論的な色彩を帯び、惑星規模のマクロ的時間相「ポイント・オメガ」へと折り返されていくことは注目に値する。人類の進化と破滅が互いをウロボロスのように飲み込む無限大の時間相が立ち現れているという意味において、この小説は、加速の一途をたどるグローバリズムにパラダイム転換を迫る広大なヴィジョンを内包している。このような視座に立ち、地球カレンダーにおいてほとんど無に等しい人類の位相に思いを馳せるとき、惑星的な「深遠な時間」への回帰という人類の起源と終焉をも射程に入れた哲学的考察を導き出す本作は、今もって根強いアメリカ例外主義という神話を再考するうえで新たな導きの糸になるように思われる。本研究では、メビウスの輪のように反転する進化と終末をめぐる主人公の省察が、文明の極限点に明滅する核の恐怖をいかに照射するのか、「惑星思考」を援用しつつ、アメリカ帝国の黄昏を炙り出そうとした。

未来に向かって直線的に流れる合衆国の時間を無化するような広大無辺な砂漠を前

に、主人公エルスターは、惑星規模の地質学的な「深遠な時間」と文学の分かち難い関係に思いを馳せる。詰まるところ、こうした砂漠の時間から生じる桁違いの畏怖の念は、太古の「原初的世界」と、その進化の果てに現出する人類の終末的な「絶滅」という一見対極的な惑星のカオス的な時間相が、ループ状に擦り合わされるところから生じている。進化の極限点において到来する絶滅の危機というアポリアこそが、エルスターの思索の中核をなすわけだが、彼はイラク戦争が囁く終末の予感に震撼しつつ、崇高にして不気味な惑星的時間相の震えに、実験国家アメリカの例外主義の終焉を探り当てたと考えられる。そこから浮かび上がるのは、輝かしい進化を遂げた人類が、文明の進化の旅路の果てに核によって内破し、生命を欠いた無機物のダストとして再び惑星に回帰するかもしれぬという終末的転回である。

本研究成果は、日本アメリカ文学会関西支部 11 月例会において発表され、論文「時の砂漠-惑星思考の『ポイント・オメガ』」「異相の時空間-アメリカ文学とユートピア」(英宝社、2011)として上梓された。

上記の研究成果の刊行年に起きた 3.11 を踏まえ、本研究が取り組む「アメリカ文学における進歩のデザインと破局の表象」についてさらに考察を深めていくうえでも、「災害」というテーマが避けて通れない問題系として浮上してきた。本研究の大きな柱である「破局の表象」と「進歩のデザイン」という二つのテーマをリンクさせる文学テキストとして、スーザン・ソントグの『火山の恋人』(1992)を取り上げ、日本アメリカ文学会関西支部第 55 回支部大会(2011 年 12 月 3 日、武庫川女子大学)のフォーラム「Natural Disaster とアメリカ的想像力」の講師として、「噴火・蒐集・生成-The Volcano Lover における歴史のポイエーシス」と題する研究発表を行った。「災害はそれ自体では表象しえぬ

事象であり、文化的構築物を媒介とする形を通して初めて表象を帯び、言説化されうる」という認識のもとに開催された本フォーラムを発展させ、自然の征服により文明を築いてきたアメリカにおいて自然が暴力的な相貌を帯び、カタストロフィとしてアメリカ的想像力を脅かすとき、それらを馴致すべくいかなる言説化が行われたか、スーザン・ソントグの『火山の恋人』(1992)をケース・スタディーとしてテキスト分析を進めた。そのとき焦点化されたのは、破壊と石化をもたらす一方で、肥沃な大地と文化を育んできた封じ込め不可能な反重力のマグマが歴史と織りなすドラマに、アメリカ的想像力はいかに向き合ってきたのかという問題意識である。

「惨劇のイマジネーション」の著者としても知られるソントグが、『火の平原』を著したウィリアム・ハミルトンの色鮮やかで精緻な火山表象からいかなるインスピレーションを得たのか。そしてまた、進歩と啓蒙の時代、十八世紀末に、破局の相としての噴火とフランス革命を共振させることによって、ソントグが新たな歴史のポイエーシスをいかに模索したか、テキストに即して分析を行った。地球の鼓動ともいふべき火山は、過剰にして崇高な自然災害のスペクタクルそのものと言ってよいわけだが、太古の昔より棲息し続ける怪物さながら、地底より始源的なカオスを解き放つ火山には、多様な生成変化を引き起こす時空が無尽蔵に内包されている。本研究では、ドゥルーズを援用することにより、火山の山肌を覆う溶岩や噴石に刻まれた無数の罅と気泡の痕跡の迷宮にこそ、生成変化のダイナミズムが秘められていることをまず明らかにし、主人公カヴァリエールが蒐集する溶岩の標本の罅としてのテキストを拓くことにより、ヴェスヴィオ噴火とフランス革命が織りなすソントグの歴史のポイエーシスを描出した。

研究成果「噴火・蒐集・生成 『火山の恋

人』における歴史のポイエーシス」は、『災害の物語学』、中良子編、世界思想社に所収され、2014年に刊行された。

2013年に発表された論文「シネマの旅路の果て ドン・デリー口の「もの食わぬ人」における「時間イメージ」『アメリカン・ロード 光と陰のネットワーク』(花岡秀編、英宝社)では、ドン・デリー口の『ポイント・オメガ』(2010)のプロローグとエピローグという二つの外枠物語を手掛かりに、ドゥルーズのシネマ論を導きの糸とし、彼の最新の短編「もの食わぬ人」(2011)をシネマ・ロード・ナラティヴとして読み直し、シネマという「生きた静物画」に潜在的に秘められた生成変化の開かれた時間相を明らかにした。その過程において、アメリカ文学における「破局の表象」と「進歩のデザイン」という、本研究の大きな柱をなす二つのテーマの錯綜した関係を解きほぐすには、「時間の蝶番を外す時間」、すなわち非人称的な「時間イメージ」の解明が大きな役割を果たすことが明らかになった。

本研究を締め括るにあたっては、「進歩のデザイン」の究極的な方向性として「生命のデザイン」が浮上し、人類の終焉とポスト・ヒューマンの到来をもたらしかねないエンハンスメントの問題系が、「幸福の追求」といかに関わるかという新たな研究の地平が開けた。詳細については、「アメリカ文学におけるヒューマン・エンハンスメントの進化と「幸福の追求」の未来学」(日本アメリカ文学学会、『アメリカ文学研究』第50号、2013年)を参照。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 3件)

1. 渡辺克昭、「噴火・蒐集・生成 *The Volcano Lover*における歴史のポイエーシス」、日本アメリカ文学学会関西支部第55回支部大

会フォーラム「Natural Disasterとアメリカ的想像力」、2011年12月3日、武庫川女子大学

2. 渡辺克昭、「時の砂漠 惑星思考の『ポイント・オメガ』」、日本アメリカ文学会関西支部例会、2010年11月6日、京都女子大学

3. 渡辺克昭、「『囚人のジレンマ』におけるバイオ・ポリティクスの逆説」、アメリカ学会第44回年次大会部会A「逆説のアメリカ核政策と核意識を中心に」、2010年6月6日、大阪大学

〔図書〕(計 4件)

1. 渡辺克昭、「噴火・蒐集・生成 『火山の恋人』における歴史の創造/想像」、『災害の物語学』、世界思想社、2014、74-101.
2. 渡辺克昭、「シネマの旅路の果て ドン・デリー口の「もの食わぬ人」における「時間イメージ」」、『アメリカン・ロード 光と陰のネットワーク』、英宝社、2013、201-224.
3. 渡辺克昭、「時の砂漠 惑星思考の『ポイント・オメガ』」、『異相の時空間 アメリカ文学とユートピア』、英宝社、2011、310-333.
4. 渡辺克昭、「ホブズタウンより愛をこめて 『囚人のジレンマ』からフェアリー・ダスト・メモリーへ」、『二世紀アメリカ文学のポリティクス』、世界思想社、2010、215-247.

6. 研究組織

(1)研究代表者 渡辺克昭

(KATSUAKI WATANABE)

大阪大学・大学院言語文化研究科・教授

研究者番号：10182908